

◎論考◎

森近運平と内山完造、そして中村登

— 後月郡高屋村の少年時代 —

久保卓哉

内山完造と魯迅は、深い友情で固く結ばれていたことはよく知られている。だがその内山完造が、大逆事件で処刑された森近運平と交流があったことはあまり知られていない。あまりというより、全く知られていないといった方がよい。

交流があったのは少年時代で、二人の間には中村登という、後にアメリカに渡ってエンジニアになった少年が介在する。交流の場となったのは、後月郡高屋村丹生にあった中村登の家である。

森近運平と幸徳秋水、菅野須賀子、大石誠之介等二十四名に死刑判決が下ったのは明治四十四年一月十八日であった。このとき内山完造は京都の赤野三次商店で働き、女物のショールを売っていた。時に二十六歳、京都に来て十年がたった。

内山完造が初めてふるさとを出たのは十二歳のときであった。精研高等小学校四年生を中途退学し、遠く大阪まで奉公に出たのである。そのときは井原にある荻田の叔父さんの家（完造の母・直の実家）で一泊し、そこから人力車に乗せられて笠岡駅まで行き一人で汽車に乗った。手には、みやげの松茸を入れた藁苞わらぶと二つを持ち、姿はまるで藁草履をはいた山の小猿のようだったと、後に自ら語っている①。

大阪に奉公に出る前の完造は、ふるさとの芳井村沢岡さかおかで「塩辛」と呼ばれるイタズラっ子であった。この頃完造は、よく、峠を越えた先にある高屋村丹生の親戚の家へ遊びに行っていた。その家は中村といい、完造の父、内山賢太郎の姉にあたる内山松多が嫁入りした家であった。

高屋村丹生の中村家は、江戸時代から続く名家で、内山松多が嫁いだ中村文太郎は高屋村村

長をつとめ、また、文太郎の父と祖父はともに医師であった。父を中村藤一郎といい、祖父を中村耕雲という。

内山完造は、自分の七、八歳の頃を述懐して「この頃私は、ひなぎこと云う峠を越して約一里の路を高屋村丹生の親戚の家へ父の使いに単身でやらされたものであった」と語っているが、お使いの時だけではなく、ふだんから泊まりがけで遊びに行っていた。

「泊まった完造が朝起きるといないので、寝ていた蒲団をはぐってみると、寝小便の跡があった。恥ずかしくて逃げて帰ったんじゃ」と語るのは、完造の伯母の松多で、おねしよをして帰った完造のことをよく話していたという②。

中村家には、完造の従兄弟がたくさんいた。いずれも完造より年上だが、完造と三歳違いの米いね（次女）、五歳違いの登（三男）、八歳違

←上海の内山書店店頭に立つ内山完造(昭和17年、内山が上海から中村喜久太に送ったもの)



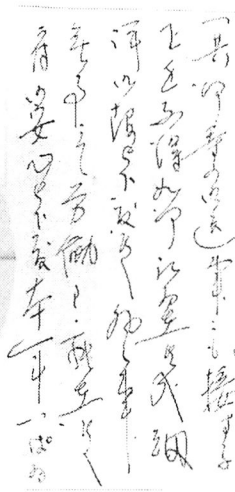
の勉(次男)、十歳違いの小瀧(長女)、そして十三歳違いの長男喜久太である。年齢からすると完造と一緒に遊んだのは、三男の登と次女の米であろうが、中村家にはさらにもう二人、養女みかの美賀と無津むつがいた。美賀と無津は文太

郎・松糸夫妻の養女ではなく、文太郎の父で同居していた医師中村藤一郎の養女で、このときは藤一郎も美賀も無津も一緒に住んでいた。まことにぎやかな大所帯の家であった③。

少年の内山完造は、丹生の中村家に行くときは「ひなぎこ」という峠を越えた。この山道はつづら折りで、人がひとり通れるだけの細くて急な坂道である。急ではあるが、峠には芳井村からは三十分ほどで着く。峠を越えると道は左中、右の三路に分かれ、分かれ道には石の道標が立っている。道標の上面には地蔵が彫られ、その下には道を示す案内の文字が刻まれている。丹生へ行くには中の道を行くことになる。峠から五分ほど下ると、山道が尽きて田があり、田を横切ると、高屋村へ下って行く街道に出る。ここが行程の半分で、街道をそのまま横切って脇道に入ると道はもっと狭くなり、再び登り始める。人家はここまで一軒もないのだが、しばらくすると、斜面に石垣を積んで建つ家が、二軒三軒とかたまっている集落があり、それらの家と畑の間を通りすぎる。すると昼でも薄暗いやぶにおおわれた道があり、更にすすむとその先に黄土色の土塀が見えてくる。このどっしりした土塀に囲まれた家が、丹生の中村の家である。少年完造は一時間ほどかけてこの道をかよったのである。

完造のいとこで中村文太郎・松糸の子、中村喜久太と中村登の兄弟は、親への孝心があつい、礼儀正しい青年と少年であった。この弟の中村登が森近運平の同級生で、二人は同じ精研高等学校に通った。また兄の中村喜久太は、森近運平が敬慕する人物であった。

森近運平が中村喜久太に宛てたはがき二通と書状一通がのこっている。一通のはがきは、岡



→ 27歳の中村登とその筆跡(シアトルから兄・喜太にあてた写真入り端書。明治40年10月2日付)

→ 27歳の中村登とその筆跡(シアトルから兄・喜太にあてた写真入り端書。明治40年10月2日付)

郎が校長の枝益六に訴えたことよって、自分へのいじめが止んだものの、今度はいじめの対象が中村登に移った。「此度の犠牲は中村登と云ふ少年である。併しこれは私に比べると少し抵抗力があつた」と中村登のことを書いている。

私は十二の年の四月から高等小学校へ通った。学校は井原の下町にあるので、私の家からざっと一里半もあらう、当時郡に一つの高等小学校であつた。此頃の事で私の忘る事の出来ぬのは、余り弱虫であつたもんだから、殆んど毎日の様に大きい奴に苛められて泣いて居つた事である。一説には、私が力の弱いくせに、理屈で人をやり込めるから苛められたのだと云ふが、さう一概に云ふ事は出来ぬ。一度弱い者いぢめが始まると、直ぐ模倣・習慣といふ風で、何の意味もなく皆寄つてやるものである。隣家の喜市迄私の頭をなぐりあがつた。今考へても忌々しい。其年の秋、愈々堪へ難いと云ふので、父が学校へ行つて校長先生に事情を訴へた。其結果私を苛める張本人の山成敬一と云ふ奴が非常に譴られ、私は泣かずに済む事になった。それが秋であつたと思ふ事には、父が木ねり柿を校長への手みやげに持つて行く。校長は山高帽へそれを

受けた。その様子が今でも眼の前に見える様である。それから敬一はいたずらの目的物を変更した。此度の犠牲は中村登と云ふ少年である。併しこれは私に比べると少し抵抗力があつた。彼是する内敬一は退学する、私たちは二年生になつた。序に云つて置く。其時の校長枝益六先生と云ふのは地方で有名な教育家であつたが、後「硬骨」とか何とか云つた様な理由で職を去られた様に覚えてゐる。

(森近運平『回顧三十年』)

この時期はまさしく完造が「ひなぎこ」峠を越えて中村登の家に遊びに行つていた時期にあたる。森近運平の家と中村登の家は、直線距離にして一キロメートルの近さである。道は登りだが、曲がりくねつた山道を行つても二、六キロメートルくらいの距離である。中村登の家に遊びに行つた森近運平が、そこ

←少年時代の森近運平(明治29年4月)。



に遊びに来てはおねしよをして帰つた内山完造と一緒に、山に入つて遊んだと考えるのが自然である。林間には少年たちの声が響きわたつていたのである。

のちに上海に渡つた内山完造は、上海から幾通もののがきや写真を中村喜久太に送つてゐる。喜久太の長男で後に東京大学農学部に入る中村九郎に宛てたはがきと雑誌もある。それらは住む人がいなくなつた中村家の廃屋から見つかつてゐる。だが、新しく見つかつた内山完造の中村喜久太、九郎に宛てた書簡類のすべてを読んでも、完造が森近運平を述懐して書いたものは見あたらない。内山完造は大逆事件については、「(明治四十四年)一月十八日 幸徳秋水等二十四名大審院に於いて死刑を宣告せらる(之れが日本に於ける社会弾圧の始めであつたらう)」と『花甲録』でしるすのみである。

魯迅を権力の弾圧から守つた内山完造は、森近運平が受けた弾圧に対しても黙つて見てゐるわけにはいかなかつた筈である。なぜならば、完造はこう語つてゐるからである。「後年私がトルストイの無抵抗に共鳴し、日本の切支丹迫害に際してその無抵抗の態度に絶対的讃辞を呈し、ロシアに於けるズボボール教徒が徴兵に際して銃を取らないで抵抗したこ

とから国家から受けた大迫害に対してあくまで無抵抗を守りつづけた後、英国の非戦論教徒であるクエーカーに援けられて徴兵免除の条件つきでカナダに安住の地を得た、こうした色々に熱涙を惜しまない、いや私はこうした事柄に対してはその熱涙の流れるのをどうしても止めることが出来ないものである」と。そしてまた完造は、日露戦争に向かう国家に対して非戦論を展開した内村鑑三に心酔していたからである①。

だが完造は、大逆罪で処刑された森近運平を無実だと弁護し、熱涙を流して権力を糾弾することはできなかった。それができる時代はまだ到来していなかったのである。

おわりに森近運平の同級生中村登とその父中村文太郎について述べておかねばならない。中村登は精研高等小学校を卒業すると、呉の海軍工廠に職工として入職し、次いで横須賀の海軍工廠に移った。この時、十六歳の内山完造が自分も職工になろうと横須賀の中村登のところに転がり込んだことがあった。登はけんもほろろに「何をしに来たのだ。商人になるはずの人間が工員になるなんて大きな考え違いだ。世話も出来ないし面倒も見ることができない。すぐに帰れ帰れ」といって、

飛び出してきた大阪のモスリン友禅工場に完造を追い返した①。登が二十一歳の時である。

中村登はその後、二十七歳の明治四十年一月にアメリカに渡ってエンジニアとしてミシガンの自動車産業で働き、三十七歳の大正六年、宮崎県の黒木春尾と結婚し、終生アメリカに住んでアメリカで死んだ。その間、たくさんの手紙とアメリカの先進ぶりを伝える雑誌、自動車のカタログ、仕送りの金などを父の文太郎に送り続けて、アメリカの生活ぶりを紹介した。

中村文太郎は、明治十六年に高屋村子町役場の用掛になって以来、高屋村村会議員、高屋村助役を務め、明治四十二年十二月七日から四年間高屋村村長を務めた。森近運平が警察に拘引されて高屋村から東京に護送された時の村長が中村文太郎である。森近運平が拘引された明治四十三年六月十四日の四日後に発行された森近嘉三郎の家族構成を証明する戸籍謄本には、「岡山縣後月郡高屋村戸籍吏 中村文太郎」の名とともに認証印を押す欄がある。文太郎は印を押すとき、森近運平の行く末をどのように思ったのだろうか。大正十年三月六日に七十五歳で生涯を閉じた中村文太郎に、森近運平を語った形跡はない。

【注】①内山完造著『花甲録』岩波書店、一九六〇年。

②中村晋の記憶による。中村晋(すすむ)

は、中村文太郎の末弟にあたる中村正臣の三男で、長兄の中村亨(とおる)

は上海内山書店で働き、魯迅と許広平夫人、その子息周海嬰とは日常的に接

していた人物である。のちに児島の姓を名のり福山市で児島書店を開いた児

島亨がその人である。次兄の中村威(たけし)は井原市教育委員会に勤め、中

村晋は福山市で洋品店を開いた。

③中村藤一郎の戸籍を記した明治三十一年の古文書によると、美賀と無津の二人は、藤一郎の次男で文太郎の弟にあ

たる中村良次郎の娘である。良次郎が三十二歳で亡くなったために、藤一郎

は孫の二人を自分の養女とした。美賀は、明治八年二月三日生。無津は、明

治十三年四月一日生である。

④森近運平、中村喜久太宛はがき二通。

明治三十三年八月十九日。明治三十四年五月二十三日。

森近運平、中村喜久太宛書状。明治三十七年四月一日。

(二〇一二年十二月二十一日記)

大逆事件 ニュース

の真実をあきらかにする会

第52号

2013年 1月24日発行

◎巻頭言◎

「再審請求関係資料集」

の刊行にむけて

山泉 進

「大逆事件」から五十年を期して、坂本清馬さんと森近栄子さんが請求人となって大逆事件再審請求がなされたのが一九六一年一月十八日、それから今年で五二年になる。

「再審」は刑事訴訟法に規定されている制度で、いわゆる冤罪者を救済するために設けられているが（実体的真実発見）、他方では確定した判決を覆すことになる（法的安定性）という理由から、日本では「狭き門」とされてきた。再審の手続きは、「再審請求についての審理」と「再審の審判」との二段階においておこなわれる。そして、前者において再審の「開始」が決定されてはじめて、裁判のやり直し（再審）がおこなわれるという仕組みになっている。さきの再審請求においては、一九六五年十二月東京高裁において請求棄却の「決定」がなされ、再審にはいたらなかった。請求人と弁護士は、棄却決定を不服として最高裁判所に特別抗告をおこなったものの、最終的には一九六七年七月大法廷において抗告が棄却された。それから四五年が経ち、請求人の二人が亡くなり、主任弁護人であった森長英三郎さんも亡くなり、「あきらかにする会」に参加されて裁判を支援してくださった多くの方々も世を去った。

大阪弁護士会の金子武嗣弁護士が中心になって「大逆事件再審検討会」の活動が始まっている。すでに一昨年の四万十市での「大逆事件サミット」でも金子弁護士からの報告があった。あるいは映画「100年の罅」のなかでもちらつと紹介されていたかもしれない。再審請求の要点は、有罪と判断された判決を覆すにたる新証拠の発見であり、その新証拠についての「新規性」と「明白性」を証明することである。しかし、再審の手続き自体が不明確であり、また被告人の権利に配慮されたシステムになってはいない。会員の皆さんは、本『ニュース』のバックナンバーをめぐることによって、再審請求の経過、あるいは問題点などについては、ある程度知ることができる。あるいは、森長英三郎さんが編集された荒畑寒村『大逆事件への証言』での解説や大原慧さんの『幸徳秋水の思想と大逆事件』に収録されている論考によって、より詳しいことを知ることができよう。しかし、請求人や弁護士によってなされた新証拠による無罪の証明、検察側の反論、裁判所の棄却決定理由などの原資料については、ほとんど知られていない。

昨年から森長英三郎所蔵の資料を整理して、「関係資料集」を出版する準備をしている。さいわい、『ニュース』の復刻版を出してくれた「ぱる出版」の協力をえることができそうである。「第二次再審請求」への壁は、まだまだ厚いが、先人たちのご尽力に少しは報いたい。

『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース』第52号目次

| | | |
|---|-------------|------|
| 巻頭言・「再審請求関係資料集」の刊行にむけて…………… | 山泉 進 | P.1 |
| 論考・森近運平と内山完造、そして中村登 | | |
| ——後月郡高屋村の少年時代…………… | 久保卓哉 | P.2 |
| 論考・文人たちと「大逆事件」 | | |
| ——徳富蘆花「謀叛論」を中心に…………… | 平出 洸 | P.7 |
| 追悼・堀切利高さんを偲ぶ…………… | 山泉 進 | P.10 |
| 小川武敏さんの訃報…………… | 山泉 進 | P.12 |
| ドキュメント・映画「100年の罅—大逆事件は生きている—」 | | |
| 完成に寄せて…………… | 田中 啓 | P.13 |
| 探訪・私の飛松探訪記…………… | デービットソン みゆき | P.17 |
| 考察・岡本頼一郎について…………… | 森山誠一 | P.21 |
| 資料紹介・岡本頼一郎獄中書簡…………… | 白仁成昭 | P.25 |
| 考察・新村兄弟墓碑建立期一考（試論）…………… | 石山幸弘 | P.28 |
| 資料探訪・梅田馨翠のスクラップ帳 | | |
| 『幸徳一派大逆事件』について…………… | 森山誠一 | P.33 |
| 随想・大石誠之助の獄中落書きに寄せて…………… | 辻本雄一 | P.36 |
| 記録・「誤った処刑」を追及——2年目の「院内集会」…………… | 早野 透 | P.39 |
| 報告・大杉栄と仲間たち | | |
| ——『近代思想』創刊百年記念集会』の開催…………… | 大和田茂 | P.40 |
| 中村より・墓前祭、交流会、秋水研究会の活動を粛々と…………… | 北澤 保 | P.42 |
| 紀州・新宮より・記念映画上映会に | | |
| 八〇〇人の市民参集して感動…………… | 濱野小夜子 | P.44 |
| 紀州・本宮町より・講演、墓参、映画鑑賞など幅広く活動…………… | 丹羽達宗 | P.45 |
| 記録・「大逆事件」101年目からのステップ | | |
| ——ふれ愛講座とシンポジウム…………… | 編集部 | P.47 |
| 報告・「峯尾節堂資料館」その後…………… | 正木健雄 | P.51 |
| 信州より・「明科大逆事件を語り継ぐ会」のこと | | |
| ——信州安曇野明科から…………… | 大澤慶哲 | P.48 |
| 豊津より・訪問者、取材に協力しつつ地道に活動…………… | 小正路淑泰 | P.50 |
| 岡山より・二〇一二年の森近運平墓前祭と今後の予定…………… | 森山誠一 | P.52 |
| 映像紹介・DVD『謀叛—大逆事件—〇〇年—』 | | |
| ——高木顕明の信仰と生き方から「教団教学」を問い直す…………… | 大岩川 嫩 | P.53 |
| 映画上映案内・「100年の罅」一般公開へ！！「ポレボレ東中野」で3月、4月に上映…………… | | P.54 |
| 文献紹介…………… | 大岩川 嫩 | P.55 |
| 事務局より・活動報告、会計報告、編集後記…………… | 山泉進・大岩川 嫩 | P.59 |